

# 界の使 い

かごめ

## 界の使い

---

少しだけ開いていたキッチンの小窓から、ぬるい夜風が舞い込んだ。

その風と共に、私の目の前に男が現れた。

それは男だけれど、明らかに人間ではないと分かるので、ちっとも怖くなかった。

男は片膝をつき、私を見上げて言った。

「あなたにお伝えいたします。今すぐ首からその紐を外し、立っている椅子から降りるのです」  
乾いてひび割れた唇は、まるで亀裂の入った大地のようだ。

その亀裂からチラリと覗いた口の中は、グラグラと燃えているかのように赤かった。

今にも溢れそうなマグマを連想して、私の鼓動は何故だか早くなった。

「誰？」

「私は界の使いです。あなたに生きよと。それを伝えるにここへ参りました」

男は淡々と言った。

その表情に説得しようとする情熱を感じないのは、まん丸の眼球に細長い瞳孔のせいだろうか。  
感情が読み取れない。

「何の使いか知らないけど、ほっといてください」

「なりません」

男は立ち上がると、五本の指をいっぱい広げ、私にその手を差し伸べた。

「さあ、こちらへ」

「自分の命くらい好きにさせてよ」

「ならないのです」

「何でよ！」

「そう決まっているのです！」

男は大きな声で叫ぶと、足をダンッと踏み鳴らした。

部屋中に振動が伝わり、椅子がグラグラと揺れる。

椅子から足を踏み外しそうになって、咄嗟に首にかけている紐を外した。

「落ちる」と思った瞬間、男の手が私を抱えゆっくりと床へ着地させた。

まるで、水の中にいるような浮遊感だった。

瞬きをした次の瞬間、男はもういなかった。

私の足元に、小指ほどの大きさの切れた尻尾が残されていた。

その奇妙な体験の後、私は思い立って死ぬまでに見ておきたいリストを作った。

いよいよ最後の項目、バオバブの木を見にマダガスカルへ渡った。

そして、私はマダガスカルで見つけたのだ。あの時と同じ尻尾を持つトカゲを。

同行した現地ガイドによれば、今まで見たことのないトカゲだという。

専門機関に問い合わせた所、発達した趾下薄板があり、ヤモリの仲間であるらしいが新種とのことだった。

真っ赤に燃えるような口内をしているそのヤモリは、  
正式にトカゲ亜目ヤモリ科のリストに登録されることとなった。  
命名権があるので、私は迷わず『magma』と名付けた。

『ヤモリから狂犬病の特効薬』  
マダガスカルに生息するマグマヤモリ（英名magma）の唾液から、  
狂犬病の治療に効果が期待できる成分が見つかった。  
現在、実用に向けて開発中である。

結局、マダガスカルから帰国した後も私は死ななかつた。  
数年後にこの記事を読んだ時、あの奇妙な出来事の意味が分かった気がした。  
あの夜残されていた切れた尻尾は、今もここにある。

おわり

## 界の使い

<http://p.booklog.jp/book/111164>

著者：かごめ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukiesan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111164>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト